東京新聞のこちら特報部「へこたれない人々」の取材で、母校の慈恵医大と裁判で争ってきた経過を話し、記事になりました。息子が医療過誤にあってから今日までの経緯をとおして、いまの医療現場の問題を訴えました。

(第3種郵便物認可)

医療事故 真実求め

母校相手に闘った医師
富家 孝さん(63)



医療現場の現状について話す富家孝さん＝都内で

ふけ・たかし　1947年、大阪市生まれ。72年、東京慈恵会医科大学卒業。病院経営を経て、日本女子体育大学助教授、早稲田大学講師などを歴任。格闘技通で新日本プロレスのリングドクターを務める。学生相撲の元選手で、現在は慈恵医大相撲部の総監督。内科医の傍ら、ジャーナリストとして医療問題に取り組んでいる。著書に「医者しか知らない危険な話」など。

検査受けた長男、障害残る

「医療現場で事故が起きると、医師は保身のために情報を隠し、改ざんし、ウソもつくことを知ってはいた。しかし、あそこまで平気でウソをつくとは…」とため息をついた。

舞台は母校、東京慈恵会医科大学の付属病院。四年前、大学生の長男(二)＝当時＝が手足のしびれを訴えた。脳の血管が炎症を起こす「血管炎」が疑われた。血管にカテーテルを挿入し、造影剤を注入する「脳血管造影」の検査を受けた。

検査中にけいれんを起こしたが、検査は続けられた。長男には、言語障害や右半身にまひが残った。身体障害者二級の認定を受けた。

「検査は中止すべきではなかったか」「リスク

数々の疑問が消えなか　裁判に極めて異例だった。母校から納得でき　病院側は「検査前にリ　ソをつくんだ」と怒りに

富家に一何てそんなウ

性が高く　特に若い男にその傾向が強い』と

った。私は医師だが、科が専門で、そこまで知らなかった。説明があれば検査に合意しなかった」

病院側は「懇願」にいてはその後、法廷「勘違いだった」と撤した。だが「検査は確診断に必要」「脳血管影には五百件に一件割合で合併症のリスクあり、それは説明したとの一般論を繰り返した。

富家は大阪市で代々く医家の十六代目。親に医師は三十三人いる医療が抱える問題は明分かっている。その体を生かして、積極的に報発信する医療ジャーリストの顔も持つ。

さらには、医療事故相談にも応じ、患者に院や医師を紹介するンサルタント業も営むいわば「病院選びのロ」。長男の検査入院を母校に決めたのも、